

第37回庭野平和賞 贈呈理由（仮訳）

庭野平和賞委員会は、第37回庭野平和賞を韓国の禅師である法輪（ポンニュン）師に贈呈することを決定した。同師は韓国内外において人道支援、環境問題および社会活動に多大なる貢献を果たしてきた。異なる信仰や文化を持つ人々の間にゆるぎない信頼関係と善意を築く同師の努力は、その平和活動において根幹をなすものであり、他の人々への多大な影響力をもつ。同師の功績はまさに仏教徒の理想の姿として描かれるであろう。

法輪師は1953年に韓国で生まれ、地方圏の農家に育ち16歳で出家の道へと進んだ。35歳のとき、現代社会が抱えるさまざまな問題（暴力、紛争、環境破壊、貧困問題など）に対応するため、仏教の教えに基づくコミュニティー、浄土会を創立。浄土会の会員（行者）は、すべての生物が互いにつながりあっていることを深く理解し、一人ひとりが心の平安を実現するとともに他への慈悲の実践を通じて、世界全体の幸福に貢献することを教えられている。

これまで法輪師は朝鮮半島内外における平和構築のために働いてきた。さまざまな手段による支援を実現させるため、いくつかの団体を創設している。そのうちのひとつである平和財団は研究所として南北統一の促進に向けた研鑽を行い、問題解決の糸口を示唆する鋭い見通しをいくつも提供している。また、支援団体グッドフレンズでは、人道支援と諸宗教間におけるアドボカシー活動を担い、北朝鮮の人たちの飢餓や自然災害による苦しみを和らげる取り組みを行っている。

また法輪師が創設した国際支援団体ジョイン・トゥゲザー・ソサエティ（JTS）では、貧困と飢餓撲滅に向け、北朝鮮、インド、フィリピン、インドネシアといった国々で人道支援、救援活動、持続可能な開発などに取り組んでいる。2019年、同師はバングラデシュのコックス・バザールを訪れ、隣国ミャンマーから避難してきたロヒンギヤ難民に向けて10万台のストーブを届けた。

また環境保全に取り組むための団体エコブッダは、現代人の環境破壊に対する認識を高め、過剰消費をなくし、環境への悪影響を緩和するライフスタイルの選択を奨励している。

法輪師の取り組みには、北朝鮮文通キャンペーンや平和集会などのアドボカシー活動から、危機対応、人道支援まで、さまざまな手段による平和構築に向けた活動が含まれる。これら

からも明確なのは、同師の平和構築に向けた努力が、多くの手段をもって最も重要なニーズに対応できるように整えられているところにある。また、人種や宗教といった地理的、また比喩的に認識される隔たりを超越し、あらゆる存在の相互依存を真に認め、肯定していく方法で提供されるところにある。同師のこうした取り組みは、庭野平和賞が役割としてきた宗教間協力の促進と平和の大義に大きく貢献してきたものと断言できる。

法輪師は、平和への取り組みには次の二つの側面が含まれていなければならない信じている。第一に、一人ひとりが瞑想や習学によって心に抱える苦痛を和らげ、内なる幸福と平和を養うこと。第二に、構造的要因、他者との関係によって引き起こされる苦痛を取り除くために、個人および集団で社会変革に向けた取り組みを行うこと。真の平和を築くことができるのは、この二つの次元でバランスの取れた真摯な取り組みが同時並行で行われているときだけである。仏教の教えを理解し、活用するという同師の根底にある搖るぎない信念が、平和のための取り組みを形作り、推進し、持続させる精神力と、社会変革を起こす力に頼れている。同師の内なる仏法実践は、その活動を切に必要としている世界において、たゆまぬ努力を続ける師の喜びと心の温かさとしてその身に反映されている。

庭野平和賞委員会 委員長 ズーザン・ヘイワード